

TW 大学病院抗がん剤，免疫抑制剤処方が院内処方へ —この逆流を止めるのは保険薬局薬剤師の意識改革あるのみ—

大萱 豊秋*

たんぼぽ薬局株式会社

(受付：2014 年 11 月 20 日 受理：2014 年 11 月 28 日)

要 旨：最近，ハイリスク薬である抗がん剤と免疫抑制剤等の処方を手始めに，院外処方から院内処方に戻す大学病院が出現した．当然ながら，保険薬局薬剤師に動揺が広がっている．そして，根拠のない憶測がインターネット医療サイトの投稿欄に多数書き込まれている．高額な薬品を病院自ら購入し，差益を得るためであろうというのである．しかし，院内に戻すことは，病院収支からはマイナス要因でしかない．唯一，リスクマネジメントの点で安心を得られると判断した結果と思われる．保険薬局薬剤師は，この流れを生む要因となったのが自分たちにあったと理解し，調剤と服薬指導のレベルアップを図るべきである．患者，医療関係者から見て安心できるファーマシューティカルケアを実現した時，再び，多くのメリットを持つ院外処方に変換が行われると確信している．

キーワード：ハイリスク薬，院内処方，保険薬局薬剤師，抗がん剤，免疫抑制剤

改正薬事法(現医薬品医療機器等法)により薬剤師に求められる責任と未来

赤羽根秀宜*

中外合同法律事務所

(受付：2015 年 2 月 24 日 受理：2015 年 3 月 2 日)

要 旨：平成 26 年 6 月 12 日に改正薬事法(現医薬品医療機器等法)が施行された。平成 21 年の同法の改正にともなって、第三類医薬品以外の一般用医薬品のインターネット販売が原則禁止され、この規制につき、最高裁判所が無効と判断したため、今回の改正に至ったという経緯がある。そのため、この改正は、インターネット販売の規制について注目が集まりがちであるが、調剤業務においても実は大きな意味のある改正である。本稿では、調剤業務についてどのような改正がなされ、それが薬剤師の責任や未来にどのような影響を与えるのかを検討する。

キーワード：調剤業務の改正

ピロキシカムカプセル剤の剤形変更による物理化学的特性変化の評価

井上 裕* 船渡 俊一 佐藤彩友里 村田 勇 金本 郁男

城西大学薬学部医薬品安全性学講座

(受付：2014 年 8 月 21 日 受理：2014 年 11 月 26 日)

要 旨：カプセル剤の剤形変更は製剤特性に影響を与える可能性がある。本研究では、ピロキシカム(製剤 A, B, C)のカプセル、脱カプセル物および粉碎物を用いて、安定性、製剤特性およびチューブ通過性の検討を行った。製剤特性評価は水分含量測定、色差測定、粒度分布および走査型電子顕微鏡測定を行った。安定性試験・水分含量測定より、4 週間保存後の各製剤の主薬含量は、97.5～100.6%となり、各脱カプセル物および粉碎物は、保存初期に比べ約 1～2%水分含量が増加した。色差測定より、40℃ 相対湿度 82% 保存下の粉碎物は、保存初期と比べ製剤 A の 2, 4 週間および製剤 B の 4 週間に色調変化を認めた。粒度分布・走査型電子顕微鏡測定より、各製剤は粉碎により小径化を認め、水分含量の増加および色調に寄与すると推察した。チューブ通過性試験より、製剤 A および製剤 C の脱カプセル物の主薬通過率は約 80%, 他試料では 91%以上であった。この通過性の差は各試料の懸濁性に起因すると推察した。

キーワード：ピロキシカム, 色差, 溶出試験, 粒度分布

消費者ニーズにあったドリンク剤(栄養ドリンク)ナビプログラムの作成

井上 裕^{*1} 南雲 由美² 長瀨まどか¹ 村田 勇¹
木村 昌行¹ 金本 郁男¹

城西大学薬学部医薬品安全性学研究室¹, 薬樹株式会社²

(受付: 2014 年 11 月 29 日 受理: 2015 年 1 月 23 日)

要 旨: 今日, 二人に一人はドリンク剤(栄養ドリンク)を服用しているとされているが, ドリンク剤が多様存在するため, 消費者はどれを購入したら良いのか選択が難しい. ドリンク剤を選択するために Web 上に簡易な検索サイトを設けたり, メーカーがオリジナルのナビプログラムを提供したりしている. しかし, いずれも情報量としては少なく, 市販されているすべてのドリンク剤を網羅した検索ツールは存在していない. そこで本研究では, 現在市販されているほとんどのドリンク剤を検索することができるプログラムを作成した. さらに, 安全性に配慮し, 消費者ニーズに合ったドリンク剤を選択できるナビプログラムとした. 消費者がいくつかの質問に答えると, 消費者に合ったドリンク剤が選択される. このナビプログラムが, 薬局やドラッグストアで使用されれば, 消費者ニーズに最適なドリンク剤を選ぶためのメインツールとして有用であると我々は考える.

キーワード: ドリンク剤, ナビプログラム, データベース, 消費者ニーズ, 安全性

高齢者の睡眠薬の安全使用における薬剤師介入の必要性

井上 裕^{*1} 岩崎 友香¹ 村田 勇¹ 磯田 明宏²
井澤 正義² 勅使河原正敏³ 金本 郁男¹

城西大学薬学部医薬品安全性学研究室¹, 秩父市立病院薬剤部², 秩父市立病院内科³

(受付：2014 年 6 月 2 日 受理：2014 年 11 月 7 日)

要 旨：高齢者では睡眠薬を服用している患者は多いが¹, 副作用である転倒のリスクが高い。そこで高齢化率の高い地域である秩父市立病院に通院していた高齢者を対象に薬剤 5 剤(エチゾラム, ゾルピデム酒石酸塩, プロチゾラム, ゾピクロン, トリアゾラム)の適正使用と安全性について処方データとカルテをもとに調査を行った。その結果, 65 歳以上の患者(555 名)において投与制限量を超えて処方されていた患者が 4 名, 投与期限の上限 30 日を超えて処方されていた患者が 26 名確認された。カルテ調査からはふらつきの訴えが 3 件確認され, このうち 1 名は肝機能, 他の 1 名は腎機能の検査値が慢性的に異常値を示していた。転倒は 3 件確認され, このうち 2 名は腎機能の検査値が慢性的に異常値を示していた。薬剤師が患者に薬を手渡す際, 処方が適切であるかを判断するために, 患者情報の共有の円滑化が早急に必要であると考えた。

キーワード：高齢者, 睡眠薬, 適正使用, 薬剤師, 転倒

薬剤師が行うべき在宅業務の潜在需要と患者属性の検討

大嶋 繁^{1,2} 宮本 実央¹ 根岸 彰生¹ 大島 新司¹
清野恵理子³ 小林 大介^{*1,2}

城西大学薬学部¹, 城西大学薬局², 訪問看護ステーションさつき³

(受付: 2014 年 10 月 2 日 受理: 2014 年 12 月 3 日)

要 旨: 少子高齢化の進展により, 社会保障に係る財政負担は増加する一方であり, 過大な訪問薬剤管理指導の請求は限られた保険財政を圧迫することになる. 薬剤師は訪問指導が必要な患者を見極め, 訪問薬剤管理指導を実施する必要がある. そこで, 薬剤師未介入の患者宅を訪問し, 患者に必要と思われる薬剤師の提供するサービスの種類およびサービスを必要とする患者の割合を調査した. また, 薬剤師が継続して訪問する必要がある患者の割合を算出した. さらに, 患者の属性も同時に調査し, 薬剤師介入を必要とする患者と患者属性の関係を調べた. 調査した患者の 98% に服薬指導をはじめとした何らかのサービスが必要であった. また, 在宅患者の 60% が薬剤師の継続的な訪問を必要とした. さらに, 比較的介護度の低いおよび独居の患者がより薬剤師の訪問を必要とした. 薬剤師は, 潜在的な患者が多数おり, かつ, 重症度の低い時期に介入する必要があることを認識すべきである.

キーワード: 在宅医療, 在宅患者訪問薬剤管理指導, 居宅療養管理指導, 薬学管理, 薬局

薬局薬剤師の医薬情報収集に関するニーズの変化について —北海道地区における平成 19 年と平成 23 年の比較—

梅田 純代^{*1} 柳本ひとみ² 古田 精一² 黒澤菜穂子¹

北海道薬科大学社会薬学系医薬情報解析学分野¹, 北海道薬科大学社会薬学系地域医療薬学分野²

(受付: 2014 年 8 月 21 日 受理: 2015 年 2 月 20 日)

要 旨: 薬剤師の医薬情報収集のニーズ変化を調査するため、北海道内の薬局薬剤師を対象に平成 19 年および平成 23 年にアンケートを実施し(回収率: 平成 19 年群 23.0%, 平成 23 年群 28.0%), 両群の比較を行った。(1)全体比較: 日常の薬剤師業務上で困っている点(問 1) ($p<0.01$) で有意差が認められた。検索手段(問 2) では、有意差は認められなかったが、平成 23 年群ではインターネット使用が増加していた。医薬情報室からの希望する情報の受け取り方法(問 3) では、平成 23 年群で電子媒体($p<0.01$) が有意に増加した。(2)層別解析: 業務形態別では、OTC 販売なし薬局群において、チェーン店舗化の増加($p<0.01$) および問 3 ($p<0.05$) に有意差が認められ、また OTC 取り扱い薬局群において、問 1 ($p<0.05$) に有意差が認められた。経営形態別では、チェーン店群において、問 3 ($p<0.05$) に有意差が認められた。以上、薬局薬剤師は 4 年間で法改正および電子情報獲得手段の変化に影響を受け、時代に必要な情報を IT により入手する傾向にあることがうかがえた。

キーワード: 薬局, 薬剤師, 医薬品情報, IT, 地域医療